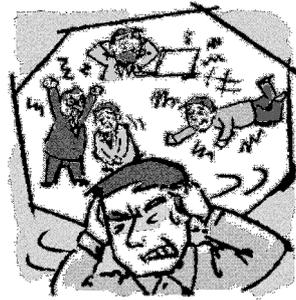


今月のテーマ

捨てる生活



え・城谷俊也

苦難に向き合う 心のありよう

大 間万事塞翁が馬」という格言があるように、人の一生

は幸不幸が交錯して織り成されるものです。人生を充実したものに
するかどうかの分岐点は、苦難と
その受け止め方にあります。

*

S県で建築会社を営むK氏は、
5代目の社長として、22歳で後継
者として家業に入りました。

父との確執をはじめ、次々と問
題が押し寄せるなか、顧客トラブ
ルで数千万円の負債を抱え、会社
は崩壊寸前に追い込まれました。
孤立感に苛まれながらも、難病で
亡くなった母に誓った「愚に報い、
喜ばれる人間になる」という思
いを胸に、必死に働き続けてきま
した。なぜ自分以外の問題で苦し
まなければいけないのか」と反芻
しつつ、父親を変えたい。社員を
教育したい」と逃げることなく、
苦難に立ち向かってきました。

しかし、環境はなかなか好転し
ません。親戚や社員に頭を下げ、
辛うじて資金をつないできました
が、K氏にとって、仕事は辛いも

のではありませんでした。

転機が訪れたのは41歳の時で
す。倫理法人会との出会いから、
苦しみに立ち向かう」という自
分の心のベクトルの方向が違って
いたことに気づき始めたのです。

これまでは外にばかり心を向
け、相手を責めていたが、言える
だけの自分だっただろうか

自分を静観すると、△番頑張っ
ているのも、一番働いているのも
自分だ」との思いから、周囲を怒
鳴りつけ、しかめっ面をして働く
姿が目につかんできました。しか
し、経営が厳しい時に支えてくれ
たのは家族であり社員でした。

自分がいかに周囲に助けられて
きたかを思い、母に誓った「喜ば
れる人間になる」ことをもう一度
胸に刻んだK氏。そして、苦難に
立ち向かうのではなく、ありのま
まに受け止め、爽やかに対応して
いこうと決心したのです。

それからというものの、K氏は経
営理念を策定し、活力朝礼を導入
して、自社のミッションや情熱を
社員に語るようになりました。起

きることをすべては自分の問題だと
捉えるようになると、怒る機会も
格段に減りました。また、明朗、
率先垂範の実践を心がけているう
ちに、社員にも積極性が現われて
きたのです。その結果、新規顧客
が増え、数年で債務超過が解消し、
黒字に転じたのです。

K氏は、倫理を学んでいなければ、
苦難の連鎖から脱却できなかった
かもしれない」と振り返ります。
まず自分から変わることに、苦難
をそのままに受け入れること」を
根幹に据え、社員と喜びを分かち
合いながら仕事に励んでいます。

苦痛は、なかなか喜べるものでは
ない。それは、自分本位であり、己
にとらわれているからである。苦痛
のただ中にとざされた時は、その中
から抜け出して、外から自分の姿を
心を、静かに眺めてみるがよい。

丸山敏雄著 『天類の朝光』より

苦難や人と対峙してしまう自己
本位の心から離れて、起きてくる
ことを大らかに受け入れる時、苦
難そのものが人生を豊かにする、
かけがえのない宝となるのです。